

すべての子どもたちの確かな学力の定着をめざしてⅢ

—読書習慣を支える「背景」をさぐる—

西田 晋

本研究では、子どもたちの読書習慣を支えるものは何か、その「背景」に焦点を当てながら意識調査の分析を進めた。そこでは、読書習慣と子どもたちの生活実態や意識との間にどのような関連があるのか、また、家の人のどのようなかかわりが読書習慣を支えるものになっているのか、について、明らかにした。そして最後に、子どもたちの読書習慣を確立させるための取組の推進・充実に向けて、若干の提言を行った。

第1章 読書習慣に焦点を当てた分析の視点

子どもの読書に関する実態とともに学力との関連や家庭環境との関連について、先行研究を概観した。そこでは、子どもの読書行動と学力との間に関連があること、読書習慣を支える家庭での働きかけが存在することが確認できた。

〔生活意識調査（平成18年度実施分）について〕

分析は、家庭における学習・生活の実態把握をするために行った生活意識調査の結果を活用した。また、意識調査の結果と学力との関連を見るために、平成18年4月に京都市教育委員会が教育研究会と共催で実施した「学力定着調査」の結果（国語・社会・算数・理科の各正答率）の記入を依頼した。

〔調査対象〕 京都市立小学校第6学年児童

〔調査時期〕 平成18年7月5日～21日

〔分析対象となる有効回答数〕 1,370件

意識調査の結果を分析するに当たっては、次の二点を主な分析の視点とした。

- ①子どもたちの読書習慣に着目し、「読書習慣」と家庭学習の実態や生活意識との関連を見つめること。【「読書得点群」別分析を通して】
- ②読書習慣を支えるものは何か、家の人のかかわりとの関連を見つめること。

【共分散構造分析を通して】

第2章 読書習慣と関連があることは何か ＜学力との関連＞

「学力定着調査」の各教科の正答率は、平日・休日ともに読書時間を多く確保している、と回答した子どもの群ほど高い傾向にあった。

一方、平日・休日を問わず、読書を「ほとんどしない」と回答した子どもの群は、すべての教科で最も低い正答率を示した。その中で最も低い正答率を示したのは、休日に読書を「ほとんどしない」と回答した子どもの群であった。

＜読書習慣と自分自身との関連＞

読書習慣に関連する設問の回答結果を基に得点化し、1370人の子どもを、獲得した得点の上位よりおよそ25%ずつ階層化した。そして、得点の高い群から順に「読書得点1群」、以下「読書得点2群」「読書得点3群」「読書得点4群」と命名した。

次に学習に向かう意識や姿勢に関する設問の回答結果と読書得点群とのクロス集計を行い、それぞれの結果を図1、図2のようにグラフ化した。

図1は、「むずかしい問題をといているときでも、すぐにあきらめずにねばり強く取り組んでいますか。」の回答結果である。「いつもしている」と回答した群に着目すると、読書得点の高位群ほどその割合が高いことがわかる。

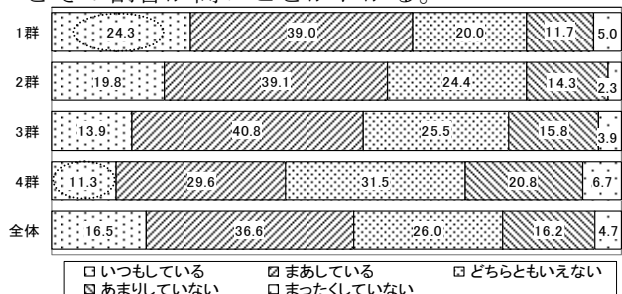


図1 むずかしい問題をといているときでも、すぐにあきらめずにねばり強く取り組んでいますか。

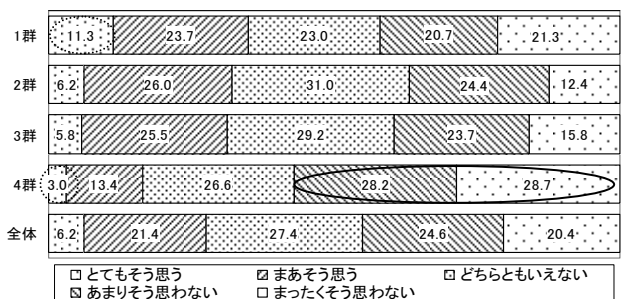


図2 あなたが勉強をするのは「勉強することが楽しいことだから」ですか。

このように分析を進めた結果、読書の習慣と、「学習に向かう姿勢」「学習に取り組む目的意識」「自分に対する意識」との間には関連があることが示唆された。

＜読書習慣と家の人のかわりとの関連＞

図3は、「家の人は、本が好きだと思いますか。」の回答結果である。「とてもそう思う」と回答した群に着目すると、1群は40.7%、4群は16.9%であり、両者を比べるとその割合は1群の方が高いことがわかる。一方、「まったくそう思わない」と回答した割合に着目すると、4群が最も高いことがわかる。

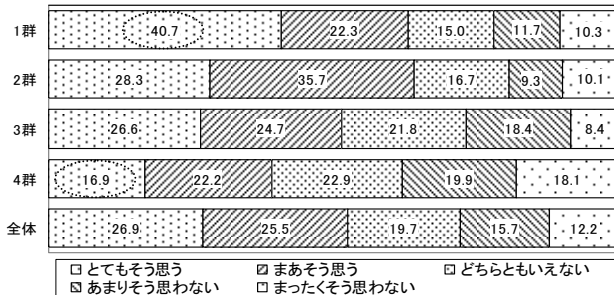


図3 家の人は、本が好きだと思いますか。

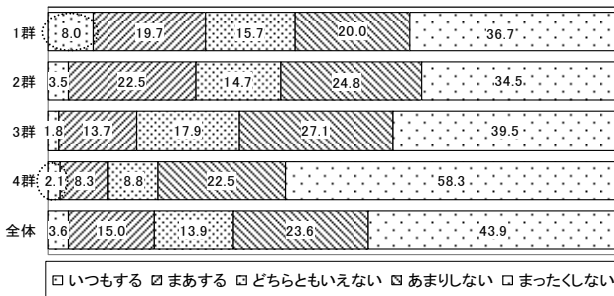


図4 家の人と、本を読んだり感想を話し合ったりしますか。

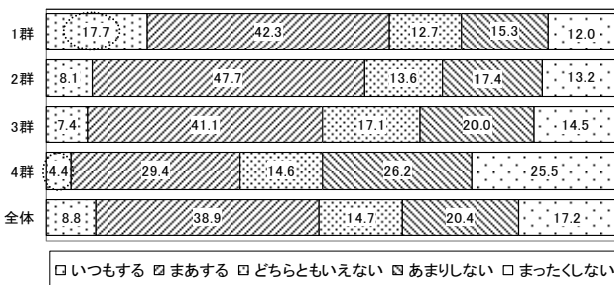


図5 家の人と、図書館や書店に行きますか。

また、家の人と「本を読んだり感想を話し合ったりする」「図書館や書店に行く」経験について、「いつもする」「まあする」と肯定的に回答した割合は、読書得点高位群の子どもほど高かった。さらに、それぞれの表側と表頭を入れ替えて、選択肢ごとの読書得点群の割合について比較した。

以上の結果、「本に関する共有体験」が、子どもの読書習慣の形成に向けて重要な視点になることが示唆された。大人が読書好きの“モデル”となることや、図書館や書店に行く機会が充実していることが、子どもの読書行動を誘うものになると考えるのは自然なことだろう。読書に対する興味や関心をはぐくむ上で、家庭が重要な役割を担っていることを、改めて確認することができた。

第3章 読書習慣を支えるものは何か

図6は、「読書に関する意識」から「読書習慣」への因果関係を想定し、共分散構造分析を行った結果である。1%水準ですべて有意である推定値が得られた。この図では、因果関係を示す矢印に数値（パス係数）を示している。この数値は、変数間の関係の強さを示しており、“数値（絶対値）”が大きいほど関係が強い（影響が強い）と判断できる。したがって、図6から次の内容が読み取れる。

- ・「読書に関する意識」から「読書習慣」へのパス係数は0.44(**)であり、この数値は2つの潜在変数の相関係数と見なすことができることから、「読書に関する意識」の高まりが「読書習慣」の形成に影響を与えることが確認できる。
- ・「読書に関する意識」の変化は、家の人と「本を読んだり感想を話し合ったりしている」経験に最も強く影響を与えたということがいえる。

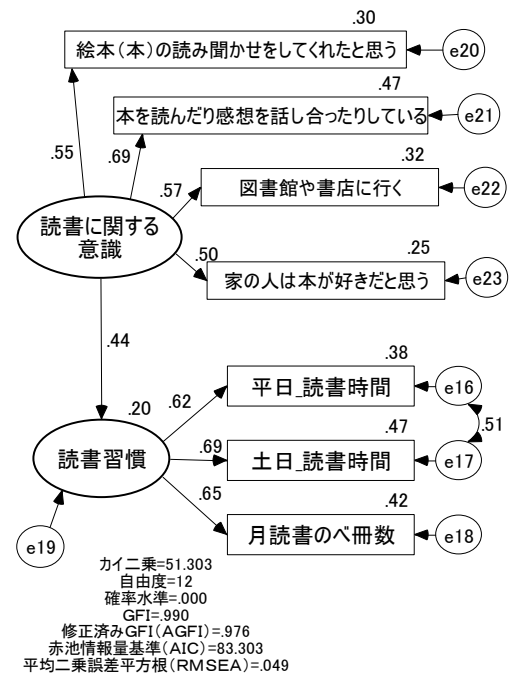


図6 「読書に関する意識」から「読書習慣」への因果モデルとその分析結果（修正後）

第4章 分析を終えて

分析結果に表れた数値の背景を推し量りながら、読書習慣を定着させるための工夫について「本とふれ合う時間や場を工夫すること」「本との出会いの場を工夫すること」「読んだ本の量と内容を認めること」「子どもが読んでいる本を大人も読むこと」を柱に、筆者の経験をふまえ若干の提言を行った。特に「いっしょに本を読もう」という言葉には、本を読む「時間」「空間」とともに、本の「内容」を共有する意味があるにとらえ、子どもが読んでいる本を大人も読むこと＜共読のススメ＞が、積極的に推進したい取組であることを述べた。